

広めるだけの積極的な基盤が日本人の生活の中には存在したのではないかと論ぜられるのである。

Dutthattakka-sutta と

須陀利経との比較対照について

深 尾 乗 真

Dutthattakka-sutta (瞋怒八偈経)は現存パーリー語仏教聖典の Sutta-nipata の才四章を Atthakka-sutta というが、それがさらに十六のストタに分れているうちの才三のストタに相当するものである。Sutta-nipata は教蔵中の才五、即ち

Khuddakaka-nikaya (小部)の才五に相当し、現在の学問的研究に於て、仏教の多数の諸聖典のうちでも、古く成立したものであるが、それらの才四章 (Atthakka-vagga) と才五章 (Pāṭiyaṇa) とは最も古く成立したものであると認められている。

この Atthakka-vagga に相当するものとして、ク

シャーナ王朝治下の西北インドの在俗信者であつた支那がシナに来て呉の王朝時代 (A.D. 223-253) に訳した仏説義足経 (大蔵 198, vol. 4, pp. 174^b-189^c) がある。義足経は上下二卷一六経に分類され、その才三経が須陀利経である。漢訳には散文の因縁譚が存し、パーリ文 Sutta-nipata にそれは存しないのである。

Dutthattakka-sutta と須陀利経との韻文を比較対照すれば、次の如くである。

Vadanti ve dutthamana pi eke,

邪念説彼短

etho pi ve saccamana vadanti,

解意諦説善

Vadan ca jatan muni no upeti,

□直次及尊

tasma muni natthi khilo kuhinci.

(Sn. 780)

善惡捨不憂

「和訳」一部の人は実に邪念なる意を語り、また実に真実の意を語る。牟尼は生じた語に近づかず、それ故に

牟尼は何処にも心の荒むことがない。

Sakam hi ditthim katham accaḍeḍḍiya

以行当耶捨

chandannūto rūciya nivittṭho

棄世欲自在

sayam samattani pakubbamaṇo

抱至德不亂

yathā hi jāṇeḍḍiya, tathā vadēḍḍiya.

(Sn. 781)

制欲人所詰

「和訳」欲にひかれ、ねがいに執著せる人は、いかに自ら見を超えることができるだろうか。自ら完全であると思ふ) なし、実に知る如くその如く語るのである。

Yo attano selavattani jantu

如有守戒行人

anānuputtṭho ca paresa pava

問不及先具演

anariyadhammam kusala tam ahu,

Yo atumanaṃ sayam eva pava. (Sn. 782)

欲来榮且自淨

「和訳」自己の戒律と努めを質問されないのに、他の人に、自ら自己を言う人があれば、諸善巧者は彼を非聖法であると言ふ。

Santo ca bhikkhu abhinibbutatto

以止不拘是世

iti haṇṭi silesu akatthamaṇo,

常自說著戒堅

taṃ ariyadhammaṃ kusala vadanti

是道法点所信

yaṃ ussada natti kuhinci loke.

(Sn. 783)

不著綺行数世

「和訳」寂靜となり、完全に安静な比丘は諸戒に於て「私はかくの如し」と誇ることなく、世の中のどこにても(煩惱)増盛がない為に、諸善巧者は政を聖法であると言ふ。

Pakappita samkhata yassa dhamma

法不匿不朽言

purakkhata santi avivadata,

毀尊我不喜惡

yad attani passati anisamsam,

自見行無邪漏

tam nissito kuppapaticcasantim.

(Sn. 784)

不著想何瞋喜

「和訳」汚れた諸法があり、(それを)あらかじめ設け、つくりなし、偏重して、自我に対して価値を見る人は、
ゆゑゆゑの疑る寂靜に依存する。

Ditthinivesa na hi svativatta

所以我有以転捨

dhammesu niccheyya samuggahitam,

魚明法正著持

tasma naro tesu nivesanesu

求正利得必空

nirassati adiyati-cca dhammam.(Sn.785)

以想空法本空

「和訳」諸法に関して執取を確知して見住居から超越することとは実に容易でない。それ故に人はそれらの住居に於いて法を斥けまた取る。

Dhonnassa hi natthi kuhinci loke

不著余無所有

pakappita ditthi bhavabhavesu,

行不願三界生

mayan ca manan ca pahaya dhono

可瞋冥悉已断

sa kena gaccheyya : anupayo so.

(Sn. 786)

云何行有処行

「和訳」智者(除遣者)には実に世の中のどこにても諸の存在に対してあらかじめ設けた見がない。智者(除遣者)は虚偽と驕慢とを捨断して、たより近づかない彼は、何故に(輪廻に)おもむくであろうか。

所当有悉裂去

anupayam kena katham vadeyya,

所道説無愛著

attham nirattham na hi tassa atthi:

已不著亦可離

adosi so ditthi-m-idheva sabba ti.

(Sn.787)

從行拔悉捨去

「和訳」たより近づくものは実に諸法に於て言説に近く、たより近づくかない者は何故に何の如く言うだろうか。何となれば彼には我も非我もあるなし、彼はここに一切の見を払い除いた。

パーリ語聖典、或いは漢訳聖典のみによつて仏教思想の原意を十分理解することは困難であると思われる。故にパーリ語漢訳両聖典或いはサンスクリット語聖典、チベット訳聖典等を比較研究して、その一致点を眺めればその原意が明確になり得ると思うのである。

竜樹に於ける二諦説

— 嘉祥の理解を中心として —

真 野 成 英

三論宗に於ける二諦説は三論教学全体の組織を形成する教理として全面的に受容せられたのである。そして嘉祥の二諦説の発展の特色は八不中道である。この八不中道によつて嘉祥の二諦説を眺めると世諦中道、真諦中道、二諦合明中道であり「八不具三種中道。即是二諦也。」と主張した処に彼の特異がみられる。

中論の二諦説は世俗の縁生法なるものを空なる勝義の真実の仮法と認め、この縁生法である仮法によつて空なる勝義の真実を自覚させる立場であり、縁生法の真実である姿なき空へ帰ろうとする仮から空へ向かう徹底的な否定の立場であつたが嘉祥は世俗の仮法を直ちに空の真実として、積極的に肯定していつた。即ち嘉祥は世俗諦と真諦とを「空仮相即」の立買から並列的に並べて、しかもそれを肯定的に見ていつたのである。竜樹の徹底し